



Title	メタ語用論的意識の流れ
Author(s)	沖田, 知子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57346
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

メタ語用論的意識の流れ

沖田知子

1. はじめに

対話は発言の順番を交代しながら進んでいく。うまく進む場合もあるが、相手の主張と自分の主張に齟齬や対立がある場合、あるいは自分の目論見を遂げたい場合などには、対話の流れを管理する必要がある。相互行為であるという反面、自分の都合のよいように流れを切り盛りすることもある。本稿では、談話の流れを左右する効果的なことば遣いに着目し、このメタ語用論的意識に基づく談話の流れの管理についてみたい。

2. メタ語用論的意識の標識

2.1 発話の階層性

Lyons (1977:749) の発話の三層構造を、毛利 (1980: 67-68) は I say < M [p] > と明示的に捉え直している。ここでは、命題 [p] に対する話し手の命題態度 <M(odality)> や発話態度 I say が付加されるという階層性がみられる。情報管理の観点からみると、基本的には命題を発話すること自体が何らかの主張となるが、さらに発話動詞の種類により発語内の力が詳述されたり、使われるモダリティの程度が加減されたり、命題部においても話し手の意識が投影されたことば遣いが含まれたりする。

相互行為の対話においても、話し手自身の発話のみならず、聞き手として相手の発話との意識的な調整や切り盛りをする。ことば遣いを巡るメタ語用論的意識を表す標識¹をどのように使い、コミュニケーションの目的を果たしていくのか。たとえば、レッテル貼りやことば取りはいずれも、文字通りの意味以外にこめられた含意や意図が織り込まれるからこそ、談話の流れを左右する働きをもつ。次例では、家計状況を巡ることば遣いが問題となる。

(1) MYERS. ①I put it to you, you were ②pretty ③desperate for money?

LEONARD. ④Not desperate. I—⑤well, I felt ⑥a bit ⑦worried. (II: 82)

①の発話態度の表明後の命題部中の③desperate に対し、メタ言語で④と否定し、⑤well でことばを濁しながらも⑦worried と言い換える。おまけに付加する②pretty をより軽度の⑥a bit に変え、相手の②③pretty desperate という強い評価のレッテルを⑥⑦a bit worried で殊更弱く言い換えて、事態の矮小化を図っている。

このように命題の一部の取り立て、話し手の評価や態度、働きかけの主張や証拠といった、情報の手入れ (elaboration) はたえず行われており、対人関係や情報管理をも意識した総合的な観点から、立体的に捉える必要がある。

¹ メタ言語的な言語表現や談話直示、垣根表現 (hedge) や高位レベル述語、発話動詞や発語内動詞などの多様な標識が使われる。Schiffrin (1980), Dafouz-Milne (2008) など参照。

2.2 談話標識

Blakemore (2002:92) は、語には概念的意味 (conceptual meaning) をもつものと、手続き的意味 (procedural meaning) をもつものがあると指摘する。rich や unhappy といった概念を表すものに対し、情報処理上の手掛かりを与える談話標識 (discourse marker) として機能するものがある。たとえば、(1)a, b は談話標識の一種である談話連結詞が違う。

(2) a. Sheila is rich and she is unhappy.

b. Sheila is rich but she is unhappy.

先行節と後続節の 2 つの命題は、a, b どちらも同じ状況下 (When Sheila is rich and she is unhappy) で真となる。しかし談話標識が違っていると、これら 2 つの命題の関係を順接 (and) とするか逆接 (but) とするかで、話し手の態度の違いが見えてくる。順接の場合は同時に成立するという話し手の想定が推論できる。逆接の場合には 2 つの命題を対照的に扱っている。したがって、先行節の解釈から来る期待感が後続節で否定されたからと言って、話し手が嘘を言ったことにはならない。むしろ but が、先行節と後続節とに矛盾があっても、先行節に拘ることなく、聞き手に後続節を処理せよという手続きを活性化させる。どの接続詞を選択したかで、一般的想定に関する流れも予測できることになる。以下も同様である。

(3) (a) Ben can open Tom's safe. (b) After all, he knows the combination.

(4) (a) Ben can open Tom's safe. (b) So he knows the combination.

(3)(a) の結論を引き出すために (b) は前提となっている。一方、(4) (b) は (a) の前提から結論を引き出している。いずれも推論を行う上での命題間の関係づけの手続きを after all や so が活性化させて、認知効果を生み出していることになる (p.95)。

このように文を超えたより広い談話 (discourse) で、談話標識が解釈の手がかりとして機能している。これに着目し、談話の流れの切り替わりなどを明示的にみたい。

2.3 メタ語用論的意識の標識

Culpeper & Haugh (2014: 241) は、4 種のメタ語用論的意識の標識 (explicit indicators of metapragmatic awareness) で多様なあり方をまとめる。たとえば談話標識にとどまらず、以下との関連における語用論的標識 (pragmatic markers) として下位分類している。

(5) (a) 談話環境 (surrounding talk: anyway, okay, even, also, but, however, so, on the contrary)

(b) 含意の認識的位置づけ (epistemic status of what is meant: you know, actually, frankly, undoubtedly, of course)

(c) 含意の実証的位置づけ (evidential status of what is meant: think, believe, suppose, guess, according to)

(d) 言表の明細 (specificity or precision of what is said: sort of, kind of, in a sense, so far as I know)

(a) はいわゆる情報処理する談話環境に影響を与えるという点で、Blakemore の談話標識に相当する。これに加え、(b) (c) (d) では含意や言表を取り立てて、話し手自ら流れの切り盛りをしていることになる。

なお語用論的標識の他に、引用法 (reported language use: quotative use of language, echoic instances of language use)、メタ語用論的解説 (metapragmatic commentary: linguistic action verbs, attitudinal categorisers, emotive-cognitive state-process など) や社会的言説 (social discourse) にもメタ語用論的意識が明示的に表れるとしている。たとえば上述(1)の論争の中心となる③⑦は、メタ語用論的解説として取り立てられている。

このように多様なレベルや手法で情報の手入れ (elaboration) が行われており、メタ語用論的意識の流れを立体的に読み解く必要がある。

3. 意識の流れ

ここでは、クリスティ (Agatha Christie) の法廷劇『検察側の証人』(*Witness for the Prosecution*)² を題材にとりあげる。金持ちの婦人殺しの裁判で、被告人レナードにアリバイの偽証を頼まれたとそのドイツ人妻のローメインが検察側の証人として証言するが、弁護人のウィルフリッド卿は、なんとか夫の無罪を勝ち取る。ところが直後に、ローメインは夫を救うべく一芝居打っていたことを明かすものの、さらに夫の裏切りが発覚し、どんでん返しが続くという筋立てである。

ウィルフリッド卿が、被告人レナードに初めて会った時の印象を述べる場面である。

(6) MAYHEW. He certainly is. How does he strikes you?

SIR WILFRID. (*Crossing to L. of MAYHEW*) ① Extraordinarily naïve. Yet in some ways quite shrewd. ② Intelligent, I should say. But he certainly doesn't realize the danger of his position.

MAYHEW. Do you think he did it?

SIR WILFRID. I've no idea. ③ On the whole, I should say not. (*Sharply.*)
You agree?

MAYHEW. (*Taking his pipe from his pocket*) I agree. (I: 30)

ウィルフリッド卿は、レナードの印象を①では *extraordinarily naïve, quite shrewd* とメタ語用論的解説を使って表現している。しかしそのなかで *yet* という逆接の談話標識を使って、レナードのしたたかさを見抜いている。続く②では、*I should say* と断りながら *intelligent* と言い換えた後、*But* と逆接の談話標識を使って、立場の危うさには気づいていない、とその無頓着さを指摘する。事務弁護士メイヒューからのレナードがやったと思うかという質問には、わからないと言いながらも、③で *On the whole* とまとめレナードは犯人ではないと *should* で期待感を込める。褒めことばに逆接の *yet, but* を続け、評価を二

² クリスティは、1933年に出版した短編小説を3幕物に戯曲化した。初演は1953年。

転三転させる。レナードの二面性に気づきながらも、ウィルフリッド卿は弁護人を引き受ける。

次は、レナードのドイツ人妻ローメインとウィルフリッド卿が初めて会った場面である。

(7) SIR WILFRID. I can't tell you how much I admire your calm and your courage, Mrs. Vole. ①Knowing as I do how devoted you are to him . . .

ROMAINE. ②So you know how devoted I am to him?

SIR WILFRID. ③Of course.

ROMAINE. ④But excuse me, I am a foreigner. I do not always know your English terms. ⑤But is there not a saying about knowing something of your own knowledge? ⑥You do not know that I am devoted to Leonard, of your own knowledge, do you, Sir Wilfrid? (*She smiles.*)

SIR WILFRID. (*Slightly disconcerted.*) ⑦No, no, that is of course true. ⑧But your husband told me.

ROMAINE. ⑨Leonard told you how devoted I was to him?

SIR WILFRID. ⑩Indeed, he spoke of your devotion in the most moving terms.

ROMAINE. ⑪Men, I often think, are very stupid.

SIR WILFRID. ⑫I beg your pardon?

ROMAINE. It does not matter. Please go on. (I: 34-35)

ローメインは、ウィルフリッド卿のことは①を受けて、So から始まる②で意味ありげに「では、あなたは私が夫を愛しているのをご存知ということなのですね」とまとめようとする。

③Of course と請け合うウィルフリッド卿に、④で逆接の談話標識を使って But excuse me と切り返す。自分は外国人だから英語の言い方がよくわからないが、と断ったうえで、⑤で But と続け of your own knowledge (自分の知識として直接知っている) という表現を持ち出す。⑥では of your own knowledge としては知らないのでは、と付加疑問をつけて疑問を呈す。ウィルフリッド卿は訝しく思うが、⑦で of course と請け合って談話の流れを繋いで、⑧で But を使って当の夫が言ったのだと反論する。ところがローメインは⑨で Leonard told you~? と夫が言ったのかと確かめる。それに対してウィルフリッド卿は⑩で Indeed と請け合い、夫が熱心に語ったことを報告する。ところがローメインは、⑪で実証的位置づけの I often think を挿入して、very stupid とメタ語用論的解説を加えた男性論を述べる。思わず耳を疑ったウィルフリッド卿が⑫と聞き返すほどである。夫を愛しているかどうかは、本人が一番よく分かっているはずのことであり、それをわざわざ夫が言ったかどうかという形を強調して、問い返すのである。このようにローメインは、夫を心配する献身的な妻というウィルフリッド卿の思い込みをはぐらかすような言動をとる。

続いて、裁判を有利にする作戦に関するローメインの反応がウィルフリッド卿を惑わす。

(7) ROMAINE. (*With a distinct irony.*) ①You think Miss French looked upon Leonard as a son?

SIR WILFRID. (*Flustered.*) Yes, I think so. Definitely I think so. I think that could be regarded as quite natural, quite normal under the circumstances.

ROMAINE. ②What hypocrites you are in this country.

(MEYHEW *sits on the chair L. of the fireplace.*)

SIR WILFRID. ③My dear Mrs. Vole!

ROMAINE. I shock you? I am so sorry. (I: 35-36)

被害者とレナードの関係を親子に見立てようとする作戦にローメインは、明らかな皮肉を込めてとト書が付いて、①と聞き返す。You think~? と実証的な位置付けをして、ウィルフリッド卿の考えを揶揄する。それに鼻白んだ卿が Definitely と強く肯定して quite natural, quite normal と主張する。とローメインは②で、一般的な in this country という形ではあるが、ウィルフリッド卿のまやかしをあてこする。思わずウィルフリッド卿が ③My dear Mrs. Vole! と改まった口調でたしなめる程である。このような対話が続き、ウィルフリッド卿は、ローメインに対する不審を募らせることとなる。

さらに、レナードのアリバイについて話をするローメインのことは遣いが輪をかける。

(8) ROMAINE. ①That is what Leonard says? That he was home with me at nine-thirty?

SIR WILFRID. (*Sharply*) Isn't it true?

(*There is a long silence.*)

ROMAINE. (*Moving to the chair L. of the desk; presently.*) ②But of course.
(*She sits.*)

SIR WILFRID. (*Sighs with relief and resumes his seat R. of the desk.*) Possibly the police have already questioned you on that point?

ROMAINE. Oh yes, they came to see me yesterday evening.

SIR WILFRID. And you said . . . ?

ROMAINE. (*As though repeating something that she has learned by rote.*) ③I said Leonard came in at nine-twenty-five that night and did not go out again.

MAYHEW. (*A little uneasily.*) ④You said . . . ? Oh! (*He sits on the chair L. of the fireplace.*)

ROMAINE. ⑤That was right, was it not?

SIR WILFRID. ⑥What do you mean by that, Mrs. Vole?

ROMAINE. (*Sweetly.*) ⑦That is what Leonard wants me to say, is it not?
(I:37-38)

ウィルフリッド卿が持ち出したアリバイの話に対し、ローメインは①でそれはレナードが言ったことかと尋ねる。それに対して鋭く、本当ではないのかと尋ねられたローメインは、

しばらく沈黙したあとで②But of course.と答えて安心させる。警察にどう話したかという質問に対しては、暗唱するようにと書が付いたうえで、③ではI saidと強調してわざわざ引用の形を繰り返す。それを不審げにメイヒューが④でエコーすると、⑤のそれでよかったのではないかと付加疑問で確かめる。ローメインの心を測りかね、ウィルフリッド卿は⑤と言ったその真意を⑥で問う。それに対してローメインは⑦で、それがレナードが自分に言ってほしかったことではないのか、と付加疑問を付けて答える。⑦ではレナードの意図を明示して引き合いに出す形にわざわざして、自分とは切り離れた言い方をする。

とうとう堪りかねたウィルフリッド卿が、夫を愛しているのかとローメインに尋ねる。

(9) SIR WILFRID. Mrs. Vole, do you love your husband?

ROMAINE. (*Shifting her mocking glance to MEYHEW*) ①Leonard says I do.

MEYHEW. ②Leonard Vole believes so.

ROMAINE. ③But Leonard is not very clever.

SIR WILFRID. You are aware, Mrs. Vole, that you cannot by law be called to give testimony damaging to your husband?

ROMAINE. How very convenient.

SIR WILFRID. ④And your husband can . . .

ROMAINE. (*Interrupting*) ⑤He is not my husband. (I: 39)

ローメインは①でレナードのことばとして答える。それに対して、メイヒューがレナードはそう信じている、と非叙実動詞 believe を使って返す。ローメインは③で逆接の but を使ったうえで、レナードは very clever ではない、と含みをもたせる。妻は夫に不利な証言はしなくてもいいと言え、なんと都合のいいことかと評する。ウィルフリッド卿が、話の流れを繋ごうと④And your husband can と言いかけると、⑤で自分の夫ではないと告げる。それまでは引用の形で話していたのが、ここでは生の命題を提示し、衝撃を与える。

裁判では、ローメインが検察側の証人として出廷する。しかも、夫 Otto Gerthe Heilger が健在のまま、ベルリンでレナードと重婚したことを告白する。

(10) MYERS. ①In any event, Mrs. Heilger, are you willing to give evidence against the man you have been calling your husband?

ROMAINE. ②I'm quite willing.

(LEONARD rises, followed by the WARDER.)

LEONARD. Romaine! ③What are you doing here?--what are you saying?

(II: 70)

検事マイヤーズは、ローメインをハイルガー夫人と呼びながら、①の In any event と談話標識でまとめ、夫と言っていたレナードの不利になるような証言をしてもよいのか、とその心持を確認しようとする。ローメインは、②でマイヤーズのことばを quite で強めて繰り返す。それを見たレナードは立ち上がり、③で行為解説の進行形、さらに後半では発話行為動詞を使った行為解説の進行形で、たしなめようとする。

続いて、事件当夜のレナードの行動に関するローメインの証言が波紋を広げる。

(11) JUDGE. (*To ROAMINE*) ①You know what you're saying, Mrs. Heilger?

ROMAINE. ②I am to speak the truth, am I not?

MYERS. The prisoner said, "I have killed her." Did you know to whom he referred?

ROMAINE. Yes, I know. It was the old woman he had been going to see so often.

MYERS. What happened next?

ROMAINE. ③He told me that I was to say he had been at home with me all that evening, especially he said I was to say he was at home at half past nine. ④I said to him, "Do the police know you've killed her?" ⑤And he said, "No, they will think it's a burglary. But anyway, remember I was at home with you at half past nine." (II: 72)

判事は、ローメインをハイルガー夫人と呼びながら、何を言っているのか分かっているのか、と **You know** を使って認識的位置づけを確認する。ローメインは②で **be to** を使って、真実を述べる義務があるのではないかと付加疑問で反問する。さらに③では、**He told me that I was to say** や **he said I was to say** という間接話法を使って、レナードの指示があったことを明らかにする。続いて④⑤の直接話法で、自分とレナードの発言を引用する。ここで直接話法にしてローメインは、「殺したことを警察が知っているか」と問うたとする。言うまでもなく **know** は叙実動詞であり、その従属節の命題は真である。核心を突いた質問に対するレナードの反応については、⑤で **And** と順接で始め「警察は強盗と思うだろう」と言ってから、談話標識 **But anyway** と仕切って命令を発したと報告する。レナードの命令の内容は、いわば証言を想定した先取りのメタ言語となっている。ここでは、その内容の真偽というよりは、むしろ話法の切り替えや **be to say** を繰り返して言うことにより、不器用ながらもレナードに言わされている印象を与えているといえよう。

ウィルフリッド卿たちが、ローメインがレナードを裏切った理由を考える場面である。

(12) MAYHEW. He's probably done too much for her.

SIR WILFRID. (*Moving up R. of the desk*) ①And she despises him for it. That's likely enough. ②Ungrateful beats, women. ③But why be vindictive? ④After all, if she was bored with him, all she had to do was walk out. (*He crosses above the desk to L.*) There doesn't seem to be any financial reason for her to remain with him. (III-1: 88)

レナードがローメインを大事にしすぎたのだろうと言うメイヒューの推測に、ウィルフリッド卿が続ける。①**And** と受けて、だからこそバカにするのだと続け、②で女というのは恩知らずだと決めつける。とは言うものの③**But** で思い直し、どうしてこんな仕打ちをするのかと考える。その理由として、④の **After all** でまとめ、レナードに飽きたのなら出て行

けば済む話だけなのにと訝しがる。ローメインの真意を測りかねている。

裁判も終盤に近付き、ウィルフリッド卿がローメインに対する陪審員の反応を予想する。

(13) MAYHEW. (*Thoughtfully*) I don't think the Jury liked her.

SIR WILFRID. No, you're right there, John. I don't think they did. ① To begin with, she's a foreigner, and they distrust foreigners. ② Then she's not married to the fellow—she's more or less admitting to committing bigamy.

(MAYHEW *tosses the pipe cleaner into the fireplace, then crosses to L. of the desk.*)

None of that goes down well. ③ And at the end of it all, she's not sticking to her man when he's down. ④ We don't like that in this country.

MAYHEW. That's all to the good. (III-1: 89-90)

ローメインに対する陪審員の反感の原因を、To begin with, Then, And at the end of it all と一つずつあげていく。最初の理由①の外国人への不信感のみならず、②でローメインの重婚、③では窮地にある夫を支えなかったこと、最終的には④で in this country での社会的言説まで持ち出す。このような当時の外国人や妻に対する社会的言説が、解釈の枠組み (frame of interpretation) として、この戯曲の仕掛けの底流をなしていることがわかる。

ローメインの裏切りを裁判で暴いて無罪を勝ち取ったウィルフリッド卿は、最初会った時から不審感を持っていたローメインに対し、高らかに勝利宣言をする。

(14) SIR WILFRID. It may interest you to know that I took your measure the first time we met. I made up my mind then to beat you at your little game, and by God I've done it. ① I've got him off—in spite of you.

ROMAINE. ② In spite—of me.

SIR WILFRID. ③ You don't deny, do you, that you did your best to hang him?

ROMAINE. ④ Would they have believed me if I had said that he was at home with me that night, and did not go out? Would they? (III-2: 110)

ローメインは、ウィルフリッド卿の① I've got him off—in spite of you. (彼を自由にした、君にはお生憎さま) ということばの後半を人称を変えそのまま②と繰り返す。それに対し③ You don't deny, do you, ~? とローメインの企みを暴こうとする。ところがローメインは、④で反実仮想の語り逸らし (disnarration) を使って、逆だったら自分の言うことを信じたのかと問いかける。ようやく真相を悟ったウィルフリッド卿は驚愕し、次のように問いかける。

(15) SIR WILFRID. (*Moved.*) My dear . . . ① But couldn't you trust me? We believe, you know, that our British system of justice upholds the truth. We'd have got him off.

ROMAINE. I couldn't risk it. (*Slowly.*) ② You see, you thought he was innocent . . .

SIR WILFRID. (*With quick appreciation.*) ③And you knew he was innocent.
I understand.

ROMAINE. ④But you do not understand at all. I knew he was guilty.

SIR WILFRID. (*Thunderstruck.*) ⑤But aren't you afraid?

ROMAINE. Afraid?

SIR WILFRID. Of linking your life with a murderer's.

ROMAINE. You don't understand—⑥we love each other.

SIR WILFRID. The first time I met you I said you were a very remarkable woman—I see no reason to change my opinion. (*Crosses and exits up C.*)

(III-2: 111)

身を捨てても夫を助けようとしたローメインの真意を知ったウィルフリッド卿は、But で始まる①で、なぜ自分たちを信用してくれなかったのかと尋ねる。ローメインはゆっくりと、②で実証的に非叙実動詞 *thought* を強調して語りかける。ウィルフリッド卿は③で And と受けて、君もそうだろうと叙実動詞 *knew* を使い反論する。するとローメインは、But で始めた④で真実を告白するのである。ここでは、逆接の *but* が何度も繰り返されているうちに真実、レナードが真犯人であることが明かされる。それを知ったウィルフリッド卿が、⑤の But に続けて怖くないのかと尋ねると、ローメインは自分のことばで生の命題⑥ *we love each other* と語る。ウィルフリッド卿は第一印象の *very remarkable* に思い至る。

ところが最後になって、ローメインは夫レナードの不実を知ることとなる。

(16) ROMAINE. ①After all I've done for you . . . What can she do for you that can compare with that?

LEONARD. (*Flinging off all disguise of manner, and showing coarse brutality.*) ②She's fifteen years younger than you are. (*He laughs.*)

(III-2: 112)

若い女に乗り換えようとする夫に訴えかけるローメインのことば①には、万感の思いが詰まっている。自らを貶めることにより夫の窮地を救った献身に対し、レナードは本性を現し、年上妻ローメインにとって残酷な事実を突きつける。②のレナードのことばは、生の命題そのままに情け容赦ない現実を暴く。

(17) ROMAINE. (*Picks up the knife from the table. Throwing her head back in sudden dignity.*) No, that will not happen. ①I shall not be tried as an accessory after the fact. I shall not be tried for perjury. I shall be tried for murder—(She stabs LEONARD in the back.) the murder of the only man I ever loved.

(LEONARD drops. The GIRL screams. MAYHEW bends over LEONARD, feels his pulse and shakes his head.)

(She looks up at the JUDGE's seat.) ②Guilty, my lord.

CURTAIN

非情な真実に気づいたローメインは、事後共犯や偽証で裁かれるよりは、唯一愛した人の殺人で裁かれない、と言ってレナードをナイフで刺殺する。この①では否定の意思表示 *I shall not be tried* を二度繰り返した後に *I shall be tried* と畳みかける構成となっている。そして②で自ら「有罪」と申告し、劇は終わる。この最後のローメインの台詞は、その意志が強く表されたものであり、生の命題として直接響いてくるものである。

4. おわりに

丁々発止のやり取りの中での、ことばの意識的使用についてみた。命題部をなす概念的意味の重要さもさることながら、それをどのように評価し伝達し、あるいは相手をどのように導こうとするのか、という情報処理上の手入れの重要さにも着目する必要がある。ことばを使用するということは、このようなメタ語用論的意識の流れの中で使うということである。状況に応じた流れの切り盛りから見ていくと、作者が狙う情報デザインの構造が浮かび上がってくると言えよう。

参考文献

- Blakemore, Diane (2002), *Relevance and Linguistic Meaning—The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Christie, Agatha (1953), *Witness for the Prosecution—A Play in Three Acts*, 英宝社.
- Culpeper, Jonathan and Michael Haugh (2014), *Pragmatics and the English Language*, Palgrave Macmillan, London.
- Dafouz-Milne, Emma (2008), “The Pragmatic Role of Textual and Interpersonal Metadiscourse Markers in the Construction and Attainment of Persuasion: A cross-linguistic study of newspaper discourse,” *Journal of Pragmatics* 40, 95-113.
- Dascal, Marcelo and Alan G. Gross (1999), “The Marriage of Pragmatics and Rhetoric,” *Philosophy and Rhetoric* 32.2, 107-130.
- Prince, Gerald (1988), “The Disnarrated,” *Style* 22-1, 1-8.
- Lyons, John (1977), *Semantics 2*, Cambridge University, Cambridge.
- 毛利可信 (1980)『英語の語用論』大修館書店
- Schiffrin, Deborah (1980), “Meta-Talk: Organizational and evaluative brackets in discourse,” *Sociological Inquiry* 50, 199-236.

※本稿は、平成 27～29 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「情報デザインのことば学」(15K02598) による研究成果の一部である。